

異世界に飛ばされた

Where is Ossan going in
another world?

おっさんは 13
何処へ行く？



シ・ガレット
ci garette



目次

第③章

いざ！ キーラの集落へ……………

157

第②章

王と家臣の選択とは……………

119

第①章

タクマ、新たな家族を連れていく……………

007



タイヨウ

召喚されてきた
日本人一家の
赤ちゃん。

ユキ

タクマが保護した
エルフの赤ちゃん。

スマレ

迷子の精霊。
魔力を制御する
力を持つ。

キーラ

魔族の
リーダーの女の子。
小悪魔な性格。

タクマ

異世界に飛ばされて
きたおっさん。
趣味を楽しみながら
異世界を旅する。

ショーン

ハミル王国の王子。
第二王妃・トリスの
息子。

タクマの仲間達



ヴァイス



ゲール



アフダル



ネーロ



ジュード



ブラン



レウコン



ナビ



アルテ



ヴェルド

イーファ

魔道具・
ゲートキーパーに
宿る人工精霊。

主な登場人物



第①章

**タクマ、
新たな家族を連れていく**



1 自己紹介

異世界・ヴェルドミールに飛ばされてきたおっさん、タクマ。

パミル王国の国境を守る方法を模索していたタクマは、日本人転移者・瀬川雄太が遺した魔道具を発見する。その魔道具はゲートキーパーと呼ばれ、なぜか巫女の衣装を着たフィギュアのような見た目をしていた。

タクマが試しに魔力を流してみると、突然ゲートキーパーは眩しい光を放ちながら、声を発したのだった――

◇ ◇ ◇

「私、ふっかーっつ!!」

「フィ、フィギュアが喋った……!?!」

タクマのサポート役の精霊・ナビは動揺して声を上げる。さつきまではフィギュアにしか見えなかったゲートキーパーが突然動き、話し始めたからだ。

タクマはゲートキーパーが放った閃光を直視してしまい、あまりの眩しさに目を押さえながら地面にしゃがみ込み、苦悶している。

そのうちに、ゲートキーパーが放っていた光が徐々に収まっていく。

周囲の光が収まると、ゲートキーパーは決めポーズを立てていた。両手を空につき上げたまま、微動だにしない。

ゲートキーパーがこんな事をしている理由は、自分を起動させた人間をびっくりさせたいというものだった。

ゲートキーパーは、瀬川雄太が隠していたレアアイテムである。そのレアアイテムを見つけた時にふさわしい、派手な演出が必要だと考えたのだ。

なので挨拶代わりに閃光を放ってみたのだが、タクマからはなんの反応もない。ゲートキーパーは、ちらつとタクマたちの方を窺う。

しかしゲートキーパーの目に入ったのは、演出にびっくりするタクマの姿ではなく、両手に電撃の魔法を纏い、今にも飛びかかってきそうなナビの姿だった。

怒りのオーラを纏ったナビは、底冷えのする声で言う。

「……あなた、私のマスターに何をしてくれたのかしら?」

ナビの尋常でない怒りを感じ、ゲートキーパーは青い顔になる。

「あ、あれ……? もしかして、やりすぎちゃった……?」

ナビは怒りの表情を浮かべたまま、静かに頷く。

「わ、悪気はなかったの！ ただ、驚かせたかっただけなの！ 本当にごめんなさい！」
自分が悪ノリした事を、すぐさま謝罪するゲートキーパー。

「……………」

ナビはゲートキーパーが本心から謝っていると感じ、深く息を吐いた。

「悪気がなかったというのは分かりました。ですが、人間は強い光を直視すると、失明する危険もあるのです。驚かせるにしても方法を選ぶべきです」

「了解しました！ もうしません！」

ナビの厳しい口調に、ゲートキーパーは敬礼をし、姿勢を正した。ゲートキーパーは、ナビが敵に回してはならない相手であると直感で理解したのだ。

「あなたはそこで静かに待っていなさい」

「仰せのままに！」

ナビは、ゲートキーパーをその場に待機させる。そして、まだ地面にしゃがんでいるタクマに近づいた。

「マスター、大丈夫ですか？ 落ち着いて、目に回復の魔法をかけてください」

目に閃光を浴びて苦しんでいたタクマは、ナビの声を聞いて少し冷静になった。深呼吸をすると、魔力を練り上げて目に流す。

タクマが目を開けると、先ほどまで真っ白になっていた視界は元に戻っていた。

「マスター、大丈夫ですか？」

ナビは優しい声色でタクマに尋ねる。

「ああ、ありがとう。どうか回復できた……それにしても、びっくりしたな」

ナビはタクマの呆気に取りれた表情を見て、くすつと笑う。

「私もびっくりしました。マスターが悶え苦しむ姿なんて、初めて見ましたから」

ふふつと笑い声を立てるナビに対し、タクマは苦笑いを浮かべる。

「いやいや、さつきは本当にヤバかったんだぞ……それで、あのフィギュアはどうなったんだ？」

タクマはずつとうごくまっていたせいで、状況を理解していなかった。

そんなタクマに、ナビが説明する。

「ゲートキーパーは、マスターが魔力を流した事で無事起動しました。そして、自分を起こした者を驚かせたくて閃光を放ったようです。私から注意をしておいたので、もうしらないと思います」

タクマがゲートキーパーの方を見ると、ゲートキーパーは敬礼の姿勢のまま、緊張した様子で固まっていた。

「なんか随分と怯えているが、一体何があったんだ……？」

怪訝な顔をするタクマに、ナビは平然と答える。

「いえ、特に何もありません。私は趣味の悪いサプライズを注意しただけです」

口ではそう言いながらも、ナビの声にはうつすら怒りが滲んでいた。普段は落ち着いているナビでも、タクマが危険に晒されると冷静さを失ってしまうのだ。

「……そうか。ナビは俺のために怒ってくれたんだな。心配してくれてありがとう」

タクマはナビの態度から事情を察し、彼女に感謝を伝えた。

「なっ!？」

タクマに頭を下げられたナビは、顔を真っ赤にしてあたふたする。

「そ、そんな事よりも、アレをどうにかしましょう！ ええ、そうしましょう！」

慌てているのをごまかすように話を変えるナビを見て、タクマはつい微笑んだ。

そしてタクマは、ゲートキーパーに目を向ける。

「で、君がゲートキーパーで間違いないんだよね？ 随分とユニークな起動だったけど……」

ちなみにタクマは、先ほどの閃光に驚きはしたものの、ゲートキーパーを怒るつもりはなかった。

ナビが注意してくれたと聞いていたので、重ねて自分から注意する必要はないと考えたのだ。

ゲートキーパーは、敬礼の姿勢のまま自己紹介を始める。

「はっ、先ほどは申し訳ございませんでした！ 自分はゲートキーパーのイーファと申します！

創造主様——瀬川雄太に作られた人工精霊として、魔道具に宿っている存在です。どうぞよろしく

お願いします！」

叫ぶイーファに、タクマは苦笑いを浮かべる。

「イーファか。俺はタクマだ。そんなかしこまった言葉遣いじゃなくて大丈夫だぞ。俺も肩がこるし、君も話しづらいだろ？」

タクマの言葉を聞いたイーファは、戸惑った様子でナビを見る。既にイーファの中では、ナビは自分より格上の存在だと位置づけられているのだ。

「マスターが許可されるなら、普通に話して大丈夫です」

ナビがそう言うと、イーファはほっとした様子で話し始める。

「いや、本当にごめんね。人間が閃光であそこまでダメージを受けるとは思ってたなくてさ。タクマさん——いや、私を起動してくれた人だから、マスターさんって呼ばせてもらうね！ マスターさんが寛容な人でよかったよ」

「まあ、次からは気を付けてくれよ……それより、早速だけど本題に入らせてくれ」

タクマはイーファに、これまでの経緯を話した。

タクマは当初ダンジョンコアを使用し、パミル王国全体に、トーランの町のような防御システムを構築しようとしていた。しかし、ダンジョンコアを作るには人間や精霊の命が必要になると知り、断念して新しい方法を探していたのである。

タクマから事情を聞いたイーファは、胸を張る。

「なるほどね。国境の防備を強化したいなら、ゲートキーパーの力を使ってくれば問題ないよ！」
それを聞いて、タクマはほっとする。

「そう言ってくれるならありがたい。最初はダンジョンコアを作るつもりだったから、ゲートキーパーっていうアイテムが存在する事も、その効果も分からなかったんだ」

「じゃあ、どうやって私にたどり着いたの？」

きよとんとするイーファに、タクマは瀬川雄太の残したメッセージのおかげだと説明した。

「なるほど……創造主様なら、メッセージを残すのなんてお手の物だものね」

イーファは納得した様子で言う。瀬川雄太なら当然そのくらいできるといった口ぶりだ。

タクマは、イーファは瀬川雄太と共に過ごし、彼の能力の高さを目の当たりにしてきたのだと感じた。

タクマも、行く先々で瀬川雄太が残してくれたアイテムに出会い、彼のすごさを体感してきた。

しかし、彼の人物像についてはよく分かかっていない。

そこでタクマは、イーファに尋ねてみる。

「なあ、イーファ。瀬川雄太——君の創造主は、どんな人間だったんだ？」

「ん？ そうだな……一言でいえば、人間嫌い？ 私を作った時には、山奥で自給自足の生活をしてたんだ。周囲に他の人間がいる事はなかったな。いつもブツブツと独り言を言いながら、私のようなアイテムを作ってた」

イーファの話からは、瀬川雄太が孤独を愛していたのが伝わってきた。人と交流するよりも、一人で物作りをするのが性に合っていたのだろうと、タクマは考える。

「彼の住んでいた場所には、誰も訪ねてこなかったのか？」

タクマがそう聞くと、イーファは頷く。

「そうだね。私が生まれてから、侵入者以外は誰も来てなかったな。それに創造主様は、人と会うよりも優先すべき事があると云ってたねー」

タクマはヴェルドミールに来た当初、一人で生きたいという考えを持っていた。しかし、この世界に馴染んでいくうちに、生きていくのには人との繋がりが不可欠だと思ふようになった。

一方で、瀬川雄太は人との繋がりを遮断してまで、物作りに没頭していたという。タクマには、その理由が気になった。

「世間から距離を置いてまで優先すべき事って、なんなんだ？」

「創造主様は、自分と同じ故郷を持つ人間が、この世界でも快適に暮らせるものを作るんだって云ってたよ。自分がこの世界から故郷へ帰るのはおそらく不可能だから、せめて同郷の人を助けたらいい。その時の創造主様、すごく悲しそうな顔してたな」

そう答えたイーファは、当時を思い出して切ない表情を浮かべる。

「同郷の人間に、この世界で自分のような苦勞をしてほしくない……創造主様はそう思っていたみたいだよ」

イーファの言葉を聞いて、タクマはこう考えた。

（瀬川雄太はこの世界で、人との交流を避けてたみたいだが……この世界に来た当初の俺みたいに、

人間嫌いつてわけじゃなかったんだろうな。人間嫌いなら、人のためにアイテムを作ろうなんて絶対に思わないはずだ」

タクマは、瀬川雄太の苦勞に思いを馳せながら言う。

「そうか……イーファの創造主は優しい男だな」

イーファは大きく頷いた。

「うん！ 創造主様は本当に優しくったんだよ。作ってくれるご飯もお菓子も、すごくおいしかったし！ それに、私一人じゃ寂しいだろうからって、仲間のゲートキーパーをいっぱい作ってくれたんだ」

「そうか……」

タクマはイーファの話聞いて微笑んだ。瀬川雄太の生活が、完全に孤独ではなかったと理解できたからだ。瀬川雄太は人を寄せつけずに過ごしていたのかもしれないが、イーファのような意思を持つアイテムたちに囲まれていたのなら、救いになった事だろう。

（こんなに楽しそうに話すって事は、イーファにとっても、瀬川雄太との生活は幸せなものだったんだろうな）

タクマがそう考えていると、イーファが慌てて言う。

「あっ！ 創造主様の事ばかり話しちゃったね！ 話を本題に戻さないよ」

「いや、瀬川雄太の事を聞いたのは俺だし、気にしないでくれ。でも、確かに王都で人を待たせて

いるんだよな……彼の話は、またゆっくり聞かせてくれ」

「うん！ もちろん！」

イーファは嬉しそうに答えた。

「じゃあ、さっきの話の続けるぞ。これを聞いた上で、本当にイーファに国の防衛ができそうか教えてくれ」

それからタクマはイーファに、そもそもなぜパミル王国の国境を防衛したいか説明した。

それを聞いて、イーファは納得したようにうんうんと頷いた。

「なるほどー。創造主様の作ったダンジョン、ヴェルド神の聖域、守護獣……パミル王国には、とんでもないものが盛りだくさんなんだね！」

ちなみにヴェルド神とは、この異世界ヴェルドミールを司る女神である。

タクマは説明を続ける。

「俺が自重せずに色々とやらかしたのが原因で、パミル王国には繁栄の基盤になるようなものが集まっているんだ。だから、それを他国から狙われる危険性が高くてな」

「ふむふむ、状況は理解できたよ」

ひと通り話を聞いたところで、イーファは両手を腰にあてると、自信たっぷりな様子でタクマに告げる。

「そういう事なら、私たちゲートキーパーに任せておいて！ どれだけ外敵が狙ってこようと、

「ばつちり国を守っちゃうからね！」

イーファによると、彼女が収納されていたバッグには、瀬川雄太の作った仲間のゲートキーパーたちがたくさんいるとの事だった。

「私や仲間たちの力をもってすれば、外敵の殲滅なんて簡単だよ!!」

殲滅という言葉は物騒だが、国の防衛はゲートキーパーたちに任せれば問題なさそうだ。イーファから膨大な魔力を感じたタクマは、そう考えた。

「じゃあ、イーファ。俺を助けてくれるか？」

タクマがイーファに頼むと、彼女はにっこりしながら言う。

「あなたは私のマスターさん！ 堂々と命令していいんだよ！」

しかし、タクマは首を横に振る。

「いや、イーファは俺の所有物じゃないからな。命令するつもりはない。君も、これから起動させる仲間のゲートキーパーたちも、自分の意思を持っているんだ。だから、全員俺とは家族みたいに付き合ってほしい」

イーファは目を丸くして固まる。そして次の瞬間、花が咲いたような笑みを浮かべた。

「家族……うん、家族ね！ 創造主様に聞いたけど、家族は助け合うものなんだよね。じゃあ、家族としてマスターさんのお手伝いをさせてもらうね！」

イーファはそう言うのと、魔力で空中に浮き上がる。そして、タクマの周辺を嬉しそうに飛び

回った。

「そう言ってくれると頼もしいな。じゃあ、イーファ。どうやって国境を守るのかパミル王国のみんなに説明するから、一緒に王城に来てくれるか？」

タクマがイーファに尋ねると、黙って聞いていたナビが割って入った。

「マスター、イーファが姿を隠せるか確認するべきでは？ 彼女の姿が人間に見られると騒がれかねません。イーファができないというなら、別の手段が必要です」

「それもそうだな。イーファはナビと違って人工精霊だし……」

ヴェルド神によって作られたナビは、万能というくらいなんでもこなす事ができる。だから、自分の姿を隠すのも可能だ。だが、ナビと同じ能力がイーファにもあるとは限らない。

「イーファ、これから俺たちは王都に戻るが、君の姿を人間に見られるとよくないんだ。ナビや君のような存在は珍しいから、余計な厄介事に巻き込まれる危険がある。というわけで、姿を消してもらえるか？」

タクマが質問すると、イーファはドヤ顔で答える。

「ふふん、そのくらい簡単！」

その言葉と同時に、イーファの姿は半透明になった。

「どう!? これでマスターさんとナビ姐さん以外には見えなくなっちゃよ！」

イーファは、そう自慢げに言った。なんでも、タクマたちにはうつすらイーファが見えるのだが、

他の人間にはまったく認識されないらしい。

タクマは、イーファがナビと同じくらい優秀な事に感心した。そして、イーファを作った瀬川雄太の能力の高さにも、改めて驚いたのだった。

2 再び王城へ

タクマがイーファを起動させたのと同じ頃。

王城の謁見の間には、国王パミル、トーランの領主・コラル、パミル王国の元宰相・ザインがいた。

コラルとザインは、パミルに謁見するために王城を訪れている。しかし今、謁見は中断していたというのも、タクマがパミル王国の防衛手段を用意するために、謁見の場を途中で抜け出したからだ。パミルたちは今、タクマの帰りを待っている状態である。

謁見の間にいた貴族たち、タクマの仲間となった元宮廷魔導士のルーチェ、元兵士のチョコ、魔族のリーダー・キーラ、ヴァイスら守護獣たちは、それぞれ控室で待機している。

その間に、コラルはパミルに報告を行っていた。

パミルはコラルの説明を受け、眉間に皺を寄せる。

「なるほど、タクマ殿が考えていた防衛方法は禁忌に触れるか……」

「はい。ダンジョンコアを作るには精霊や人間の命が必要となるそうです」

コラルは、タクマから聞いた通りの事をパミルに告げる。

「ダンジョンコアが作れないならどうするのかと心配していましたが、タクマ殿より以前にこの世界にやって来たという御仁——瀬川雄太という人物が、タクマ殿に話しかけてきたそうです。違う方法があるから、自分の遺産を探せと」

タクマは、ダンジョンコア以外の防衛方法を探しているらしい。その事が確認できて、パミルは安堵する。

しかし、それと同時に嫌な予感もしていた。ダンジョンコアを作れないのは仕方がないが、その代案となる方法も、何やら厄介そうだと感じたのだ。その方法がこの世界の常識を超えていけば、安全は確保されても、他国から注目され、目をつけられる事態となってしまうだろう。

「我が王国の守りが堅固になるのは喜ばしいが、先の事を考えると……うう、胃が痛い」

将来起こるかもしれない面倒事を思い浮かべ、パミルは頭を抱える。

その様子を見て、コラルとザインは苦笑いを浮かべた。

「パミル様、トーランでタクマ殿と深く関わってきた私から言えるのは……考えるな、です。起こった事態に臨機応変に対応するしかありません。タクマ殿は自分のやりたい事を突き詰めますからね。我らのような政治的な考えはありません」

「コラルよ……お前の普段の苦労を経験するとは思わなかったぞ」

パミルは既に心労でげんなりした表情を浮かべている。

「確かに胃が痛くなるほどに大変ですが、国の安全の代価だと思えば、致し方ないかと。タクマ殿が持ち帰る方法が何かは分かりませんが、きつと王国のためになるでしょう。我々もしつかりとパミル様を支えていきます」

コラルにそう進言され、パミルは胃の辺りをさすりつつも言う。

「……そうだな。タクマ殿に頼りすぎてはいかん。タクマ殿はあくまで方法を持ち帰るだけだ。我らはそれをうまく実用できるように、対応するでしょう……」

パミルは楽観的に考えないと体がもたないと考え直し、ため息を吐きながら冷めてしまった紅茶を口に含むのだった。



その頃、タクマはナビとイーファを肩に乗せ、移動の準備をしていた。

「よし、じゃあ王城に戻るか」

じつとしたまま魔力を溜めているタクマの様子を見て、イーファが尋ねる。

「もしかして、タクマさんは空間跳躍空間跳躍を使えたりするの？」

タクマは転移魔法・空間跳躍を使う事ができる。

タクマがイーファの質問に頷くと、イーファはがっかりした表情になった。

イーファの様子を見たタクマは、ある事に思い至る。

「もしかして、イーファは人の町を見てみたいのか？」

「そ、そんな事ないよ！」

イーファはそう否定しているものの、どうやら凶星すげの様子だ。

「王都を少し見物けんぶつしてみるか？」

タクマが、イーファにそう提案した。

タクマは謁見を中断させてしまい、既にかかりの時間パミルたちを待たせている。本当は急いで王城に戻らなければならない。

だがタクマは、イーファにパミル王国を守ってもらうなら、国の事を知っておいてほしいと考えた。パミルたちにはあとで事情を説明すれば納得してもらえらるだろう。

イーファは、タクマの提案に驚いていた。

創造主である瀬川雄太からは、ゲートキーパーはアイテムである以上、たとえ意思があつても人間からは道具として扱われるだろうと言われてきた。

しかし、タクマは本当にイーファを家族のように扱ってくれたのである。

ナビは笑みを浮かべ、驚きのあまりぽかんとしているイーファに話しかける。

「マスターはこういう人なんです。だから、考えるだけ無駄ですよ」
「ナビ姐さん……うん！ こんな考えの人もいるんだね。じゃあ、マスターさんの提案に甘える事にするよ」

嬉しそうな顔をするイーファを見て、タクマも笑顔になる。タクマはアイテムボックスから遠話のカードを取り出し、魔力を流した。
すると、すぐにコラルが応答した。

「おお、タクマ殿。連絡をくれたという事は、防衛手段が見つかったのか？」

「ええ。これからその方法を説明しに、王城に向かいます。ただ、直接城に向かうのではなく、いったんコラル様のお屋敷に跳ぶ予定です。そこから王城まで徒歩で向かいたいのですが、構わないでしょうか」

コラルは一瞬怪訝そうにしたものの、タクマの突飛な行動には慣れているので、すぐに返事をする。

「……それが必要な事なんだな？ 分かった、パミル様にも伝えておこう」

「ありがとうございます」

コラルとの短い会話を終わると、タクマはイーファに言う。

「さ、許可はもらったし、王都を見物しながら城へ行くか」

「ありがとうマスターさん！ 楽しみだな」

こうしてタクマは魔力を練り上げると、王都のコラル邸へ跳んだのだった。

コラル邸に着いたタクマたちは、早速王都の町中へ向かう。

（すっごい人だねえー。あ、あれは何？）

イーファは王都の人間たちに気付かれないよう、念話を使ってタクマと会話する。イーファにとっては、見るものすべてが珍しく、興味を惹かれたものについて、次から次へとタクマに質問した。

タクマはイーファの質問に答えていく。

（あれは屋台って言って、色々な食べ物売られているんだ）

（へえー、あれが屋台かあ。いちおう創造主様から知識として教えてもらっているけど、話に聞いていただけでは分からない事もあるんだねえ）

イーファは周囲をきよろきよろと見回しながら、更に質問を続ける。

タクマはそれに一つひとつ答えながら、ゆっくりと城に向かう。

（人間の町って面白いなあ……）

イーファはそんな事を思いながら、王都を堪能したのだった。

こうして一時間ほど町を散策し、タクマたちは城の正門へたどり着いた。

すると、門番をしている二人組の衛兵がタクマに気付く。

一人はすぐに城の中へ走り出す。コラルから通達があり、タクマが現れたら報告するよう命じられていたのだ。

もう一人の衛兵は、タクマに声をかける。

「貴殿がタクマ殿で間違いないでしょうか？」

「ああ、そうだ」

衛兵はタクマのギルドカードで身分確認を行うと、頭を下げた。

「確かにタクマ殿で間違いないですね。今、自分の相棒を迎えを呼びに行っているので、もう少々お待ちください」

衛兵がそう言っただけで敬礼した途端、彼からお腹の鳴る音がした。

「す、すみません……」

衛兵は自分の腹を押さえ、顔を真っ赤にする。

「一体どうしたんだ？」

「タクマ殿、失礼いたしました。実は、交代する予定だった衛兵が体調を悪くしてしまい、自分は今から連続で勤務しているんです……」

衛兵の答えを聞き、タクマは苦笑いを浮かべる。

「任務に忠実なのはいいが、何かあった時に力が出なくては本末転倒じゃないか？ まあ、俺が言

わなくても分かっているとは思いますが」

「はい……次から気を付けます……」

衛兵は恥ずかしそうに俯く。

「しょうがないな……」

しょんぼりした様子の衛兵を見て、タクマはアイテムボックスに入れてあったサンドウィッチを取り出した。

「ほら、腹の足しにしろ」

衛兵は戸惑った顔で、タクマとサンドウィッチを交互に見る。勤務中に食べてはまずいのではないかと思ひ、受け取るか悩んでいるのだ。

「いいから、呼びに行っている衛兵が戻る前に食べてしまえ。幸い俺たち以外に人はいないし、もし何か言われたら、俺に食わされたと言えればいいさ」

タクマはそう言って、衛兵に強引にサンドウィッチを持たせた。

「……お気遣い感謝します」

衛兵はお礼を言うと、包みを破ってサンドウィッチを頬張る。

タクマは衛兵の食べっぷりを満足そうに眺めるのだった。

しばらく経つと、コラルがやって来た。

「タクマ殿、待たせたな」

タクマはコラルと一緒に、王城の中へ歩き出す。

「まずはタクマ殿が見つけてきた防衛手段について、王城の教会でヴェルド様に報告するのがよいだろう」

コラルがそう言ったのを聞くと、なぜかイーファは深いため息を吐き、念話で呟く。

(ヴェルド神か……)

タクマはイーファの方を見る。

先ほどまで楽しそうにしていたイーファは、表情を曇らせていた。

(ん、どうした?)

タクマに尋ねられ、イーファは慌てて首を横に振る。

(え!? ううん、なんでも……)

(一体どうしたのですか? 正直に言いなさい)

ごまかそうとするイーファに、ナジが厳しい視線を向けた。

イーファは肩を落とし、話し始める。

(ヴェルド神の事を聞いたら、なんだか複雑でさ……)

瀬川雄太は、日本からヴェルドミールに転移してきたものの、ヴェルドからの加護を受ける事ができなかった。そのため、この世界で生活するのに様々な苦勞があったのだ。

(ヴェルド神が何を考えていたかは知らないけど、加護を受けられなかった創造主様が大変だったのは知っているからね。創造主様はヴェルド神の事を怒ってはいないみたいだったけど、話を聞かされた身とすれば、ちょっと……ね)

イーファはそう言って、しばらく考え込んだ。そしてタクマをまっすぐに見据え、何かを決心した様子で言う。

(マスターさん。実は私、創造主様からヴェルド神への伝言を預かっているんだ。それを直接ヴェルド神に伝えさせてもらえないかな)

タクマは、イーファをヴェルドに会わせるべきか悩んだ。イーファはヴェルドをよく思っていない様子だ。顔を合わせた時に、どうなるか予想がつかなかった。

タクマの思いを察したのか、イーファは真剣な顔で言う。

(大丈夫、怒りに任せた行動は絶対にしないよ。だから私もヴェルド神に会わせて)

イーファの言葉に嘘はないようだ。そう考えたタクマは、イーファを見て頷く。

(……分かった、イーファも一緒に行こう。でも、冷静にな)

(うん)

そんな事を話していると、あつという間に王城の中にある教会へ到着した。

「では、タクマ殿。私はここで待っているので、ヴェルド様に報告をしてくれ」

コラルに促されたタクマは、女神像の前に跪き、祈りを捧げた。

3 瀬川雄太の過去

タクマたちは、神々のいる白い空間へ移動した。

そこには、テーブルセットに座るヴェルドの姿があった。

「おかえりなさい、タクマさん。あなたの欲しかったものは手に入れられたようですね」

そう言ったヴェルドの目は、タクマの肩の上に向けられている。

「そちらが、瀬川雄太さんの遺したという魔道具ですか？」

ヴェルドが言うと、イーファはじつとヴェルドの事を見据えた。

「私は魔道具ゲートキーパーの精霊・イーファです。創造主である瀬川雄太から、あなたへの伝言を預かってきました」

「そうですか、私に伝言ですか……何を言われても、受け入れる覚悟はできています。お聞かせいただけますか？ 立ち話もなんですし、どうぞこちらへ」

ヴェルドはイーファの言葉に静かに応じ、タクマたちをテーブルセットに案内する。ヴェルドは、タクマが瀬川雄太の遺産に触れるうちに、いつかこんな事が起きるのではと予想していたのだ。

ヴェルドが椅子に座ると、タクマは彼女の対面に腰を下ろす。

ナビとイーファは、テーブルの上を用意された小さな椅子に座った。

ヴェルドはテーブルセットを取り出し、全員分の紅茶を淹れる。

「……さあ、お話を伺いましょう。タクマさんには申し訳ありませんが、最初にイーファのお話から聞いてもいいですか？」

ヴェルドは、瀬川雄太からの伝言を聞く事を最優先した。自分が彼を守れなかった負い目があるからだ。

「もちろんです、ヴェルド様。さあ、イーファ。話してみろ」

タクマがそう促すと、イーファは固い表情で口を開く。

「私はヴェルド神に思うところがあるけど……今それは関係ありません。創造主様の言葉を正確に伝えます。でもその前に、どうしても知りたい事があります」

イーファは咳払いをすると、ヴェルドを見つめて尋ねる。

「ヴェルド神、あなたはなぜ創造主様に加護を与えなかったんですか？ それに、なぜ最後まで創造主様の前に姿を現さなかったのですか？」

ヴェルドは眉間に皺を寄せて黙ってしまふ。

(……ただ単に、瀬川雄太の存在に気付けなかったというわけではなさそうだな)

タクマはヴェルドの様子から、単純な理由ではない事を察する。

そもそも、タクマはヴェルドから、瀬川雄太の過去について詳しく聞かされていない。そこには、

何かヴェルドなりの事情があったのだろうと感じた。

しばらく沈黙が続いたあと、ヴェルドは顔を上げる。

「……そうですね。まずは、瀬川雄太さんが、なぜヴェルドミールへ来たのかを話しましょう」

ヴェルドは、次のように語った。

まず、瀬川雄太がヴェルドミールへ飛ばされたのは、魔族による召喚が原因だった。

昔、この世界では人族が魔族を滅ぼすために、異世界の者の力を借りようと召喚を行っていた。それを知った魔族たちは、対抗するために人族と同じように召喚術を行う事にしたのだ。

もともと、魔法に関して人族以上の才覚がある魔族たちは、すぐに召喚術を完成させた。

人間の召喚術は、使用した事がヴェルドに分かるような作りだった。このため、ヴェルドは人間がヴェルドミールに呼ばれると、まず神々の空間に誘導していた。そして、生き残れるよう加護やスキルを与えてから、召喚陣のある場所へ転送していたのだ。

一方、魔族の作った召喚術には、ヴェルドが召喚に気付かないようにする細工まがくが施してあった。

魔族はヴェルドと対立していたため、彼女が魔族の呼び出した者に接触できないよう、術に呪いを付与したのだ。

ちなみに、そういった高度な仕掛けには、邪神じよじんが関与していた。

ヴェルドがここまで語ったところで、イーファが抗議する。

「で、でも！ あなたはこの世界の神様なんでしょう!? だったら、創造主様を助けるくらい……」

イーファはヴェルドの話の聞いても、瀬川雄太の扱いに納得できなかったのだ。

「……そうですね、イーファの言う通りだと思います。私が邪神や魔族たちにもっと目を光らせていれば、こんな事にはならなかったかもしれない」

ヴェルドは言い訳をせず、素直に頭を下げた。彼女自身、瀬川雄太を救えなかった事を何度も悔いてきたのだ。

ヴェルドは説明を続ける。

完璧に見えた魔族の召喚術には、大きな欠陥があった。

人族が作った召喚術には、召喚する位置の座標が組み込まれている。このため、召喚された者は必ず、召喚した術者のところへたどり着ける仕組みになっていた。

しかし、魔族の召喚術は違った。ヴェルドへの対策を行ったのと引き換えに、召喚された者の現れる場所は指定できなくなっていたのだ。このため、召喚された瀬川雄太は、魔族たちのもとへは出現しなかった。

当時の魔族の長おさは、多大な犠牲を払って実行した術が成功しなかったと思い込み、瀬川雄太に使った術式を破壊し、処分してしまった。本当は召喚自体は成功していたのだが、魔族たちがそれに気付く事はなかったのだ。

こうして瀬川雄太は、一人きりでヴェルドミールに放り出されてしまった。他の者と違い、なんの力も与えられないまま――

ヴェルドが語り終えると、イーファは呆然と呟いた。

「だから創造主様には加護やスキルがなかった……」

ヴェルドは、静かに頷く。

「しかも、私は呪いのせいで、長い間瀬川雄太さんを認識できませんでした。そして私が気付かぬうちに、瀬川雄太さんは亡くなっていたのです……」

「……」

事実を知ったイーファは、言葉を失い、うなだれている。まさか瀬川雄太の召喚に魔族が絡んでいたとは思わなかったのだ。

その上、不完全な召喚術のせいで瀬川雄太が苦勞するはめになったと知り、あまりの理不尽さにショックを受ける。

ヴェルドの話聞いていたタクマは、人族と魔族の浅はかな考えに怒りを覚える。

「……呼ぶだけ呼んで放置なんて、あまりに無責任だ。そもそも、安易に他の世界から人を呼び寄せるなんて……その当時の人族も魔族も愚かすぎる」

瀬川雄太の境遇を思うと、タクマはやるせない気持ちになる。

瀬川雄太は、最期には達観し、落ち着いた考えを持っていたようだった。しかしタクマが知っている限りでは、ヴェルドやヴェルドミールに憎しみを持っていた時期もあった。

もし彼に召喚されて放置されたという事実が伝わっていたら、この世界を破滅に追い込もうとし

たかもしれない。

タクマはそんな事を思いながら、ヴェルドの方を向く。

ヴェルドはタクマの視線に気が付くと、申し訳なさそうな表情で再び口を開いた。

「タクマさんの言う通りですね……私自身が召喚を認めたわけではありませんが、私の敬虔な信者である人族が召喚術という禁忌を犯した結果、瀬川雄太さんの悲劇に繋がりました。それは許される事ではありません」

ヴェルドはそう認め、唇を噛む。

「そして、罪深いという点では私も同じですね。人族が魔族を滅ぼそうとしても、止めなかったのですから。当時の私は……邪神、そしてその信徒である魔族は悪だと考えていました」

ヴェルドはそう言うと、黙ってしまふ。

実際にヴェルドは、タクマが邪神と対面した時、邪神は悪と決めつけていた。

だが、タクマは出会った邪神が完全に悪い存在だとは思えなかった。ヴェルドが善のみをよしとするのに対し、邪神はすべての者に平等に接するという考え方だったからだ。

ヴェルドとヴェルドミールの人族は、邪神と呼ばれる存在を目の敵にしていたが、邪神の本質はヴェルドと変わらない存在ではないか——タクマはそう考えるようになっていた。

善の神も悪の神もいると言われる日本から来たタクマは、一つの世界に神が一柱しかおらず、それも善の神しかないとは思えなかったのだ。

タクマは、落ち込むヴェルドに話しかける。

「ヴェルド様。そもそも人族と魔族の争いは、ヴェルド様を崇めるか、邪神を崇めるかという信仰の違いが原因と聞いています。ですが、争う必要はなかったのではないのでしょうか？ それに、今まで邪神と呼んできた存在についても、俺は悪と決めつけるべきではないような気がしているんです」

タクマの言葉に、ヴェルドは表情を曇らせた。なぜならヴェルドは、タクマが邪神を倒した一件以来、果たして邪神が本当に悪しき存在なのか分からなくなっていたからだ。

タクマは続ける。

「崇拜する神が違うだけで、人族も魔族も同じ世界に生きる者同士でしょう。お互いに尊重し合っていれば、召喚者という不幸な存在を生み出さずに済んだんじゃないでしょうか」

タクマの言葉は、ヴェルドの心にもつすぐ刺さった。ヴェルドはタクマと会う前の自分が、どれだけ不公平な神だったかを痛感する。

「私は……私は神として失格かもしれませんがね。神ならすべての者を愛すべきなのに……」

そう言ったとき、ヴェルドは黙ってしまった。

その様子を見たタクマは、ヴェルドには少し時間が必要だと感じ、イーファに話しかける。

「イーファ、大丈夫か？」

イーファはショックを受けたせいか、少し顔色が悪い。

「……う、うん。私は大丈夫」

そう返事をしたものの、まだイーファは動揺しているようだ。

タクマはそんなイーファを見て、アイテムボックスからテーブルセットと、人形用の小さな椅子を取り出した。そして自問自答している様子のヴェルドから離れた位置に設置すると、イーファに言う。

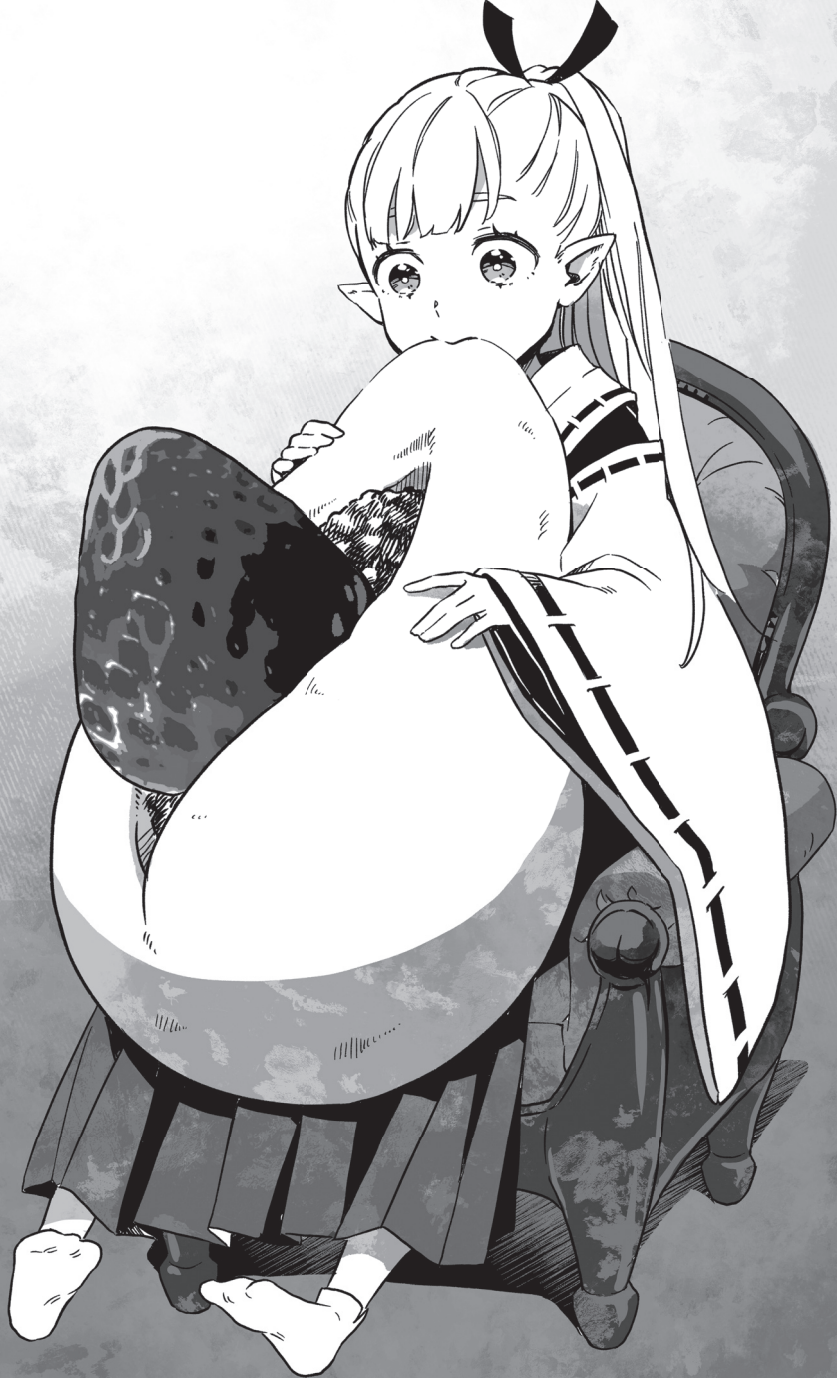
「ヴェルド様が落ち着くまで、イーファも休憩した方がいい」

タクマはアイテムボックスからノートパソコンを取り出し、異世界商店を起動する。そして、イーファに少しでも喜んでもらえるように、色々なお菓子を準備した。

〔魔力量〕：8

〔カート内〕

- ・どら焼き × 3 … 450
- ・みたらし団子 × 3 … 300
- ・イチゴ大福 × 3 … 300
- ・煎餅(醤油味) × 1 … 200
- ・カステラ(カット済み) × 1 … 1500
- ・抹茶(粉末) × 1 … 5000



・人形用湯呑^{ゆのみ}

× 2 :: 500

【合計】

:: 8250

決済を終えると、タクマはお菓子をテーブルに置いていく。

周囲に甘い香りが漂うと、イーファは自然と顔を上げた。

「ほら、見てみるイーファ。これが俺の故郷……いや、創造主である瀬川雄太の故郷のお菓子だ。食べてみな」

まだ顔色が優れないイーファに、タクマはイチゴ大福を勧める。

「うん、いただきます……」

イーファがイチゴ大福を手に取り、人形用の椅子に座つたのを確認したところで、タクマはアイテムボックスからキャンプ用のバーナーとケトルを取り出し、湯を沸かし始めた。

イーファはイチゴ大福を抱えたまま、目を真ん丸にしてその光景に驚いている。

こうしてタクマたちは、お茶を飲んでのんびりと休憩するのだった。

4 お茶会

しばらく時間が経つと、イーファは徐々に落ち着きを取り戻していった。小さな湯呑でお茶を飲みながら、静かに和菓子を頬張っている。

そんなイーファの様子を眺めつつ、タクマは呟く。

「それにしてもだ。瀬川雄太が魔族側の召喚者で、しかも魔族の勘違いで放置されていたとはな……だけど、なぜ失敗と勘違いしたんだろう。ヴェルド様に気が付かないような対策を講じていたからといって、邪神まで瀬川雄太に気が付かないなんて事あるのか？ 邪神が気付いていれば、瀬川雄太を魔族のところに連れていきそうなんだ」

タクマの疑問を聞いたナビが、控えめに口を開く。

「マスター、私の予想を聞いていただけますか？」

タクマが促すと、ナビは自分の推測を話し始めた。

「魔族たちがヴェルド様に認識されない召喚術を作ったという話ですが、実際は違うのかもしれないせん。もしかしたら魔族たちはヴェルド様から認識されないようにしたつもりで、神に認識されない術式を作ってしまったのではないでしょうか」

「……あ、そういう事か！」

タクマはハッとする。ヴェルドと同じく、邪神も神だ。ヴェルドが召喚者を認識できない仕掛けによって、邪神も瀬川雄太を認識できなかった可能性がある。

「他にも理由があるのかもしれませんが、これまでの情報で考えられるのはその辺りかと」

ナビはそう言って、ため息を吐いた。

タクマは、改めて瀬川雄太に尊敬の念を抱く。

（逆境でしかない状況で、瀬川雄太は同郷の者たちを心配できる優しい男だった。もし俺が同じ状況でヴェルドミールに投げ出されたとしたら……日本にいた時のような人間不信のままだったとしたら……俺は瀬川雄太とは正反対の行動をしていたに違いない）

そう考えて、タクマは思わず口にした。

「彼は強いな……俺にはない強さだよ」

ナビは複雑な表情でタクマを見る。

「マスター……」

「……彼の遺志を俺が受け取ったのは、意味があるのかもしれないな……彼に代わって転移者や召喚者を救う。俺は自分にできる事しかやれないが、もしこの世界にまだ同郷の者がいるのなら……」

タクマはそう呟くと、これから先、万が一同郷の者たちと接触する機会があれば、できる限りの事をしようと思っ

「マスターさん、ごちそうさま！」

ふいに、イーファの元気な声があった。

タクマを見ると、イーファは和菓子を食べ終わっていた。

「和菓子っておいしいんだねえ。口がすっかり幸せになっちゃった！」

イーファは甘いものの力で、すっかり立ち直れたようだ。そう思ったタクマは、微笑みながら言う。

「そうか。それなら和菓子を出してよかったな。それで、どうだった？ ヴェルド様に言いたい事は言えたか？」

「うん！ 私の言いたかった事は大体言えたよ……あとは、創造主様の伝言を告げるだけ」

「そうか……だが、役目も大事だろうが、イーファの気持ちも大事だぞ。イーファ自身は、伝言を告げても、過去に折り合いをつけられそうなのか？」

タクマは、イーファにそう尋ねた。

伝言の中には、瀬川雄太の辛い気持ちが含まれている事も予想できる。それを伝えるという行為によって、イーファのヴェルド神への負の感情が増してしまわないか心配だったのだ。

しかしイーファは、すっきりとした表情で言う。

「昔、私たちを封印する時に創造主様が言ったの。おそらく私がヴェルド神に会うのはずっと先で、自分の悲劇は過去の事になっているだろうって。起こった事は事実だけど、私が目覚めたあと

もずっと引きずっては駄目だよって」

瀬川雄太はそれをゲートキーパー全員に伝えたという。神に会った場合の役割を与えはするが、いつまでも過去に囚われてはならないと。

「そうか……伝言はあくまで過去の事と捉えて、イーファたちには幸せになってほしい。瀬川雄太はきつと、そう思っていたんだな」

瀬川雄太はゲートキーパーたちを家族のように大切にしていたのだと、タクマは感じた。

瀬川雄太からゲートキーパーという存在を託された自分も、彼女たちを家族として迎え入れ、幸せにしたい。そう考えたタクマは、イーファに自分たち家族がトールランでどんな生活をしているのか話した。

イーファはタクマの話をとて興味深そうに聞いていた。

「へー。引き取った子供たちや、行くあてのない人たちと暮らしているんだ。国境も大事だけど、タクマの家族たちも守らないとね！」

頼もしいイーファの言葉にタクマはほっとする。

しかし、ふとある事が気になってイーファに尋ねる。

「ところで、俺が死んだらゲートキーパーってどうなるんだ？ 俺が死んだあとでも、ゲートキーパーは国を防衛できるのか？」

半戦神であるタクマの寿命は、普通の人族よりもはるかに長い。しかし、永遠にヴェルドミール

に生き続けられるわけではない。

まだまだ先の事になるのは分かっているが、もし所有者が死ぬとゲートキーパーが機能しなくなってしまうなら、今のうちに対策しておきたい。タクマはそう思ったのだ。

イーファは少し考えると、タクマに説明を始める。

「そうだね。そういう話もしなきゃいけないか。答えは、マスターさんが亡くなっても特に問題ない、だよ。私たちはマスターさんの魔力によって目覚めたけど、封印されない限りはマスターさんがいなくても活動できるんだ。私たちの活動に必要な魔力は、ヴェルドミールの自然界から吸収しているからね」

自分がいなくなった場合でも、彼女たちは問題なく機能すると分かり、タクマはひと安心したのだった。

5 瀬川雄太の許し

「ねえ、マスターさん。ヴェルド神は、いつまでああしているつもりなんだろう」

イーファは、タクマに尋ねた。

「そうだな……」

タクマは席を立ち、ヴェルドの方へ向かう。

うなだれながら考え込んでいるヴェルドに、タクマは静かに声をかけた。

「ヴェルド様、大丈夫ですか」

ヴェルドは力なく顔を上げる。いつも朗らかなヴェルドとはほど遠い、迷いに満ちた表情をしている。

「タクマさん……私は……」

ヴェルドは後悔を口にしようとするが、タクマはそれを遮る。

「ヴェルド様、過去をいくら悔やんでも仕方ありません。失敗を教訓に、これからどうしていくの
がいいか考えるべきではありませんか？」

いくら神であっても、過去に戻る事はできない。反省する事は必要だが、立ち止まっていても
人の解決にもならないのだ。実際に過去に縛られ、長く一人でいたタクマにはそれがよく分かって
いた。だからこそ、あえてヴェルドにそう声をかけた。

ヴェルドは少し表情を和らげた。立ち直ったわけではないが、タクマの言わんとしている事は理
解できたのだ。

「そうですね……答えを出すにはまだ時間がかかるかもしれませんが、それは一人になった
時に大いに悩む事にします」

タクマは、そう言ったヴェルドを見て頷いたあと、ナビとイーファを呼ぶ。

ナビが心配そうにヴェルドに尋ねる。

「ヴェルド様、大丈夫ですか？」

「ええ、この問題は私が時間をかけて解決すべきだと分かりました。今は皆さんとの話し合いを進めなければ」

ヴェルドはそう言うのと、タクマたちにテーブルセットに座るよう促した。全員が着席したところで、タクマが改まった態度で口を開く。

「じゃあ、続きを始めましょうか。まずはイーファから、瀬川雄太が遺した伝言を」
タクマに目配せされ、イーファはゆっくりと話を始める。

「うん。じゃあ、創造主様の言葉を伝えるね。さっきまでの話は私個人の思いだから、それは理解してほしいな。ここから話すのが、本当の創造主様の伝言だから」

ヴェルドが静かに頷いたのを確認し、イーファは言葉を続ける。

「そのまま伝えるから、最後まで聞いてね。じゃあ……」

イーファがそう言うのと、その場にいる全員の頭の中に、瀬川雄太の声が聞こえてきた。

——ヴェルド神よ。まず最初に言っておかなければならないが、私はあなたを恨んではいない。いや、正確には、今は恨んでないと言っべきだろう。

この世界に来てから十数年は、なぜ神は私に手を差し伸べてくれないのか、なぜ私はこんなに苦

勞しなければならぬのかとずっと考えていた。

しかしこの世界の事を調べた結果、神は完全無欠な存在ではないと悟ったのだ。

私は幸いにして、自分の努力により、この世界で生き抜く力を得る事ができた。そして、自由を得、目標を得た。

その目標とは、私と同じように神の加護を受けられない者が現れた時も、この世界で生きていく素地を用意する事だ。それが私の生きる目的となり、憎しみの心はいつしかなくなっていた。

話したい事はたくさんあるのだが、今の話で私の気持ちは伝わったと思う。

ヴェルド神よ、最後に私の願いを聞いてはくれないだろうか。

これからこの世界にやって来る同郷の者たちには、自分の人生を謳歌できる力と知識を与えてほしい。今の私が願う、唯一の事だ。

瀬川雄太の伝言が終わると、イーファは大きく息を吐いた。

「……これが創造主様の伝言だよ」

イーファの前で、ヴェルドは静かに泣く。

「申し訳ありません……彼の気持ちを考えたら、涙が……」

辛い目に遭つてもなお、神を許した瀬川雄太の言葉に、ヴェルドは感極まってしまったのだ。

「ヴェルド様、大丈夫ですか？ もし時間が必要なら、俺たちはお暇しても……」

タクマはそう提案するが、ヴェルドは首を横に振る。

「お気遣いはありますが、話を続けましょう。瀬川雄太さんのためにも、私たちが今すべき事に目を向けなければ」

ハンカチで涙をぬぐったヴェルドは、イーファに向かって言う。

「まずはイーファ、瀬川雄太さんの伝言を運んでくれてありがとうございます。おかげで、神としてどうあるべきか改めて考える事ができました」

ヴェルドに頭を下げられて、イーファはしばらく困ったような顔をしていた。しかし、すぐに笑顔になる。

「うーん、私も自分が気になっていた創造主様の過去を、ヴェルド神から聞けてよかったよ」

イーファの顔を見て、ヴェルドも微笑む。だが、ヴェルドはすぐに表情を引き締めた。

「ですが、イーファに聞いておかなければならない事もあります。あなたはダンジョンコアに代わる防衛システムになりうると伺っています。ですが、本当に安全なのか確認しなければ、パミル王国の防衛を任せる事はできません。この空間に来たあなたを鑑定してみましたが……私の鑑定スキルは弾かれてしまいました」

「鑑定できない理由を知りたいの？ それなら簡単だよ。鑑定できる者を、創造主様と同郷の人間に限定しているんだ」

イーファはあっさりと答えた。

それを聞いたヴェルドは、驚きのあまり目を丸くして固まる。神でも鑑定できないような制限をつけた、瀬川雄太の能力に仰天したのだ。

「私たちに限らず、創造主様は自分が作ったアイテムにはすべて同じ仕掛けをしていると言ってたよ。自分が遺すアイテムは、同郷の人に使ってほしいからって」

瀬川雄太は、アイテムを鑑定できる者を異世界からやって来た人間に限定する事で、彼らだけがアイテムを使用できるようになると考えたのだろう。そう、タクマは推測する。

タクマとヴェルドは、瀬川雄太は本当に同郷の人間のために生きていたのだと痛感した。

タクマは瀬川雄太に、改めて敬意を抱く。

「確固たる意志がなければできない偉業だな。イーファ、君の創造主様はすごいよ」
タクマのまっすぐな言葉に、イーファは満面の笑みを浮かべる。

「うん!! 私たちの創造主様はすごいんだ! さっき、ヴェルド神はゲートキーパーが安全な存在か心配してみたんだけど……そこは問題ないよ!」

機嫌きげんをよくしたイーファは、ゲートキーパーの機能を説明していく。

「創造主様のおかげで、私たちゲートキーパーは大きな力を持っているんだ。所有者に指定されたゲートは、どんな敵からも守る。そういう魔道具として作られた。だけど、使う人が残酷な命令を下しさえしなければ、罪のない人に危害を加えるなんて事はしないよ」

「なるほど……要は使用者の考えが重要なですね」

ヴェルドが頷くと、タクマが話を引き取る。

「俺はイーファに、パミル王国の国境線の防衛を任せる予定です。悪意を持って入国しようとする者や、犯罪者には対処してもらおうつもりですが、私利私欲による争い事にゲートキーパーを利用するつもりはありません」

ヴェルドはほっとした顔になる。

「これで、安心しました。ゲートキーパーを使う事に問題はなさそうですね。では、加えて念のため、私が諸国に神託を下しておきましょう。パミル王国には手を出さないようにと。こうしておけば、ゲートキーパーの力を行使するような事態を、多少は回避できるかもしれません」

ヴェルドが神託という形で牽制をすれば、少なくとも敬虔な信者は手を出してこないだろう。タクマはそう考えて、ありがたくヴェルドの申し出を受ける。

「あとはパミル王国の皆さんと話合って、ゲートキーパーの運用方法を決めてください。私は、少し考えたい事がありますので……」

ヴェルドはタクマたちに帰るように促す。彼女は笑っているものの、まだどこか悲しげな表情をしていた。

タクマは、ヴェルドが瀬川雄太の事で落ち込んでいるのだと察する。だが、ここは一人で考える時間を取った方がいいだろうと判断し、ヴェルドの言葉に従った。

「……分かりました。では、俺たちは失礼します。また、伺わせてください」

タクマたちが神々の空間から去っていく間際、ヴェルドはイーファに尋ねる。

「イーファ、彼は……瀬川雄太さんは亡くなる時にどんな様子だったのですか？」

イーファは、一瞬驚いた表情を浮かべたものの、すぐに笑顔になって返事をする。

「さっきの伝言を残して、笑顔で逝ったよ！ 最期は笑ってたんだ！」

イーファの言葉は、ヴェルドにとってせめてもの救いになった。

ヴェルドは、イーファの言葉を噛みしめるようにしながら、その場に佇むのだった。

6 謁見の間、再び

タクマは女神像の前で目を開ける。神々の空間を離れ、王城の教会に戻ってきたのだ。すると、近くにいたコラルが、タクマに話しかける。

「ヴェルド様とは話せたのか？」

「ええ。ダンジョンコアに代わる魔道具を使用する事について、問題ないと言ってもらえました」
「そうか。国の防衛に関して見通しが立ったのだな」

コラルとタクマは、並んで謁見の間へ歩いていく。
その途中で、コラルがタクマに尋ねる。